

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	中村 晃史
論文担当者	主査 坂口 太一
	副査 西 信一
	副査 辻村 亨
学位論文名	Complications and Predictive Factors for Air Leak >10 Days with Neoadjuvant Chemotherapy Followed by Pleurectomy/ Decortication for Malignant Pleural Mesothelioma (悪性胸膜中皮腫に対する胸膜切除/肺剥皮術後の合併症および術後10日より長く持続するエアリークのリスク因子)
<p>悪性胸膜中皮腫 (malignant pleural mesothelioma, 以下 MPM) に対する胸膜切除/肺剥皮術 (pleurectomy/decortication, 以下 P/D) 後の詳細な合併症の報告は少ない。学位申請者は、MPM に対し術前化学療法 (neoadjuvant chemotherapy, 以下 NAC) 後に P/D を実施した症例の術後合併症の詳細 (grade 別) を検討し、難治性の術後エアリークの予測因子の評価をすることを目的に本研究を行った。</p> <p>兵庫医大病院で2012年9月から2020年5月の間にMPMに対しNAC後にP/Dを実施した連続163例の患者データを後方視的に分析した。術後合併症の詳細についてはClavien-Dindo分類を用いて検討した。また、難治性の術後エアリークのリスクが高いグループを特定するために、術後10日より長く続くエアリークをAL10として、その予測因子を単変量および多変量解析を使用して検討した。</p> <p>163例の術後30日と90日の死亡率はそれぞれ0.6%と2.5%であった。Clavien-Dindo分類において、84例(51.4%)がgrade III以上の術後合併症を認めた。術後エアリークの期間は中央値術後7日であった。AL10は53例(32.5%)で発生した。163例中58人(35.6%)は胸膜癒着術を受け、5例(3.1%)は術後エアリークを制御するために再手術を受けた。単変量解析では、Performance status (PS) (p = 0.003)、予後栄養指数 (prognostic nutritional index, PNI) (p = 0.01)、および術前胸水貯留 (p = 0.04) は、AL10の有意なリスク因子であった。多変量解析では、PS (odds ratio; 4.0, 95%CI 1.3-12.7, p = 0.02) のみが、AL10についてのリスク因子であった。</p> <p>本研究によって、NAC後のP/Dの術後死亡率は許容範囲内であること、約3分の1の症例に難治性エアリークを認め、術前のPerformance Statusが関連することが示された。今後のMPMの治療戦略の影響を与える研究であり、学位論文に値すると判断した。</p>	